連載〈まつやま　人・彩時記〉⑰

正岡子規最後の帰郷
愚陀仏庵での52日間

元松山市素鵞小学校長
伊予史談会会員
上岡　治郎

一、明治の青春

①子規の生い立ち

徳川家の親藩として、幕末に苦難の歴史を歩んだ松山藩士たちは、廃藩置県という大きな時代の流れの中を、明治という新時代に向かってたくましく前進する。

そんな中、正岡子規も松山藩士正岡常尚の嫡男として、維新前年の慶応3年9月17日（陽暦10月14日）に誕生。本名は常規（幼名は處之助のち升と改名）。当時の武士のしきたりに従って数え年6歳で「袴着」を祝うも、翌年の明治5年4月14日に父常尚が急死。以後、母親八重の愛情と外祖父大原観山の熱心な漢学指導を受けて成長。

明治12年12月、旧明教館敷地内にある勝山学校（番町小学校の前身）を卒業し、やはり同じ敷地内にある松山中学校に進学する。

第一高等中学校予科時代の正岡子規
子規と漱石は同期であった（明治20.3写）

そして中学時代には、五友の会（三並良・太田正躬・竹村鍬・森知之・子規）を中心に、漢詩文の研究に熱中し、手作りの回覧雑誌の編集や、新聞への投稿も始める。

②上京の熱望

明治維新後、権令（県知事）岩村高俊・松山中学校長草間時福・学務課長内藤素行（鳴雪）などが中心で愛媛に新風を吹き込んだために、明治の新しい国づくりに燃える若者たちは、競って東京への進学を熱望した。そして前記五友も、数年間で次々と上京を果たす。

③子規の上京

明治16年2月13日に、叔父の加藤拓川宛に東京遊学を懇請する手紙を子規が送った。

「…今時、日を空しく松山に費して一年間に一寸の知識を得んよりは、寧ろ一年の時日を東京に費して一尺の知識を取らん事、私の希望に候…」

そして、拓川から「…この手紙が着き次第、即日乗船して上京を決行するように…」という上京許可の手紙を、子規が受け取ったのは4か月後の6月8日である。

喜んだ子規は、昼食も取らず親戚の佐伯家に相談に行き、2日後の6月10日に三津浜出港を決定する。

ところで、子規にとって幸運であったのは、在京の叔父加藤拓川が旧藩公・久松定謨のフランス留学に従って、長期間共に留学することに決定。その為に、自分が東京に居る間に、親友である「日本」新聞社の社長陸羯南に紹介する、また旧藩主久松家にお願いするなど処置を取ってくれた事である。

さて、上京した子規は、須田学舎から共立学校に入学し、明治17年3月には久松家の常盤会給費生となり、9月には東京大学予備門に入学する。

そして、明治21年9月には第一高等中学校本科一年に進学し、本郷真砂町の松山藩育英奨学の常盤会寄宿舎に入舎する。

④夏目漱石との交友

子規と漱石との交友は、明治22年二人で寄席の話をしてからだと言われているが、特に親しくなったのは、当時小説家を志していた子規がまとめた「七草集」を、友人の間に廻覧したのが始まりである。

明治22年5月25日、漱石はその批評を書き、26日に常盤会寄宿舎を訪ね、病床の子規を見舞い、「七草集」の批評を手渡したのである。

ところで、子規と漱石が不思議な縁で結ばれていると感じるのは、5月9日に大喀血をした子規が時鳥にちなんで号を「子規」としたのに対し、「七草集」の批評を書いた漱石が、その批評の最後に「漱石妄批」と書いていることである。

雅号の誕生

〔子規（明治22年5月10日）
漱石（〃　5月25日）〕

二大文豪の雅号誕生秘話として大切に語り伝えたい話である。

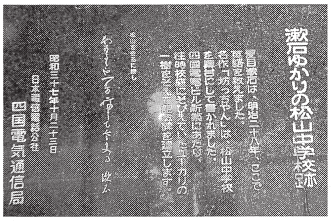
二、松山中学校と漱石

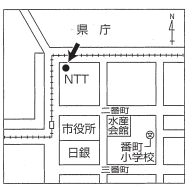
夏目漱石は本名を金之助、子規と同年の慶応3年生まれの江戸っ子で、子規とは明治17年9月東京大学予備門時代からの同期生である。

そして、子規が東京大学を中退して「日本」新聞社に入社することを決意した時にも、一度松山の子規の家を訪ねている。

そのため月俸80円という高給で、松山中学校の英語教師として赴任して来たのも、松山中学が子規の母校であるということや、一度松山に来ているということが、赴任の原因の一つとなったとも考えられる。

そして、愚陀仏庵での子規との生活や、子規の指導による松風会の俳句研究、松山近郊の吟行が、のちの「我輩は猫である」「坊っちゃん」「草枕」などの名作を生む力となったのである。





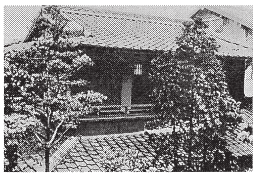
この地図のNTTの場所が松山中学校跡であり、名作「坊っちゃん」の舞台となった場所である。

わかるゝや一鳥啼いて雲に入る　漱石

三、子規、最後の帰郷

①愚陀仏庵

漱石が借りた上野義方邸内の二階建の離れに、須磨保養院を退院して8月25日に帰郷した子規が、その二日後の8月27日から52日間寄寓することになる。なお、その間の事情を解く漱石の手紙が残されているので、次に紹介する。



愚陀仏庵（二階に漱石、階下に子規）建物は戦災で焼失。現在碑が建っている。

八月二十七日　火曜

二番町八番戸上野より
湊町四丁目十九番戸　大原方
正岡俳仙へ

拝呈　今朝、鼠骨子　来訪。貴兄既に拙宅へ御移転の事と心得、御目にかかりたき由、申居候間、御不都合なくば是より直に御出であり度候。

もっとも荷物など御取まとめ方に時間とり候はば、後より送るとして、身体だけ御出向、如何に御座候や。先は用事まで。

早々頓首（漱石）

この手紙でも判る通り、子規の考えを察知した漱石が、気持ちよく子規を迎えて、松山の地での二人の友情を深めようとしたのであろう。それが次の句によく出ているように思う。

「漱石寓居の一間を借りて」

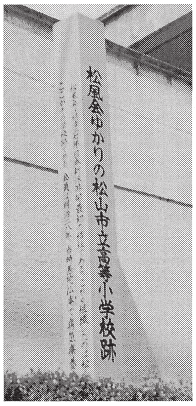
桔梗活けてしばらく仮の書斎哉　子規

これに対して漱石は、自分の事を「愚陀仏」離れを「愚陀仏庵」と称し次の句を作る。

愚陀仏は主人の名なり冬籠　漱石

そして、子規・漱石の文名が揚がるに従って、この「愚陀仏庵」が、「近代俳句の発祥の地」とか、「松山の文学発祥の地」と言われるようになったのである。

②松風会の句会



右の写真は、現在の番町小学校正門右に建てられたもので、文字を見てもわかる通り、明治28年当時、ここは松山高等小学校々地であって、全国で最初に子規直系の日本派俳句結社「松風会」を発足させた先生方の活躍する場であった。そして先生方は、休日や夜間に愚陀仏庵に通っては、子規の説く「写生」を中心とする俳句の研究に情熱を燃やすのであった。

なお、松風会発足の正確な日は明治27年3月27日の夜で、高等小学校の先生方10名が松山市湊町一丁目の伴政孝（狸伴）宅に集まって結成したのである。

そして、以後は一般の参加者も増えていったのである。

四、「散策集」

子規が愚陀仏庵で暮らした52日間のうち、前半は松山での地方俳壇の拠点作りのために連日運座を実施。その作品を新聞に発表したために、これが柳原極堂の手によって、俳句雑誌「ほととぎす」松山発刊の原因ともなったのである。

それから後半になって、子規の体調も回復したことから、5回にわたって松山近郊の吟行を試みたのである。以下行った場所の概略と、その日、子規が作った代表句を紹介することにする。

第一回吟行（9月20日・金曜）

午後、極堂と共に帰郷後初めての吟行に出かける。玉川町―石手川提―石手寺―道後公園南濠に沿って日没帰宅。（当日の吟行句・45句）

南無大師石手の寺よ稲の花

見あぐれば塔の高さよ秋の空

身の上や御鬮を引けば秋の風

第二回吟行（9月21日・土曜）

三重の塔

曇。午後、中村愛松、柳原極堂、大島梅屋の三人に誘われて病院下（現在の東雲高校）から常楽寺（六角堂）を経て御幸寺山の麓まで吟行。（当日の吟行句・24句）

松山の城を載せたり稲むしろ

秋の日の高石懸に落ちにけり

草の花練兵場は荒れにけり

第三回吟行（10月2日・水曜）

病気回復。午後より一人で吟行。藤野家、大原家を訪ね、中の川を渡って八軒家を過ぎ、伊予鉄の線路に沿い石手川提に上る。

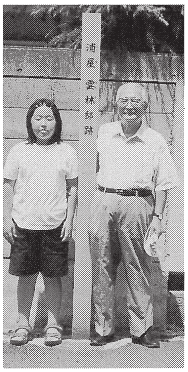
浦屋雲林村居の前を通り、監獄（現在県病院）の裏に出て、薬師寺の西より八軒家に戻る。

（当日の吟行句・21句）

眞宗の伽藍いかめし稲の花

花木槿雲林先生恙なきや

我見しより久しきひょんの木実哉



子規吟行の道を行く筆者

（浦屋雲林先生の研究）

本名は寛制。松山藩の祐筆であったが、維新後、柳井町に私塾「桃源黌」を開く。子規は「五友」と共に、中学生時代から漢詩の指導を受ける。

第四回吟行（10月6日・日曜）

快晴。日曜日のため漱石を誘い道後へ吟行。道後温泉の楼上にあがり、曽祖母小島久の墓を尋ね、花月亭に遊び、一遍上人誕生地の宝厳寺に参詣。大街道の芝居小屋で「てりは狂言」を観て帰る。

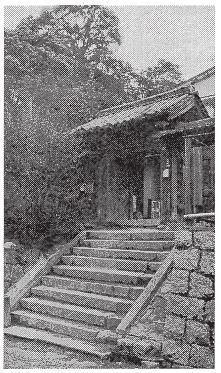
（当日の吟行句・18句）

柿の木にとりまかれたる温泉哉

稲の穂に温泉の町低し二百軒

柿の木や宮司が宿の門がまへ

正岡子規最後の帰郷・愚陀仏庵での52日間


野口宮司宅

第5回吟行（10月7日・月曜）

快晴。今出の村上霽月訪問を思いたち、朝早く人力車で出立。

正宗寺に寄り釈一宿を誘うが行けず。幼時、余戸の佐伯家を訪ねた同じ道を行く。氏神雄郡神社―鬼子母神―手引松などを過ぎ、霽月邸に至る。庭前の築山に上れば遙かに海を望む。歌、俳諧の話に余念なく、食後は今出の浜に出、村を一周し、帰り句稿をまとめる。

夕方霽月邸を辞し、余戸の森円月を訪ね、夜、愚陀仏庵に帰る。

（当日の吟行句・33句）

朝寒やたのもとひびく内玄関
鵙木に啼けば雀和するや倉の上
花木槿家ある限り機の音
行く秋や我に神なし仏なし

五、故郷を愛した子規

松山城や道後温泉を愛する人は数多くあるであろう。しかし、正岡子規ほど、故郷の風景や史蹟を俳句に詠んだ文人は少ない。

しかも叔父加藤拓川の招きで17歳で上京。以後は9回の帰郷あるのみであるが、前記**散策集**でも分かるように、帰郷のたびに俳句を詠み、それを新聞・雑誌に発表しているのである。

ところで、子規最後の帰郷となった愚陀仏庵での生活――。

俳句運座の記録、5回実施した散策集、そして愚陀仏庵でまとめた「**故郷**」の文章…今回は最後に子規の「**故郷**」を読んで、その心に触れてもらいたいものである。

《子規の帰郷回数》

第1回 明治18年7月3日～8月29日
第2回 〃 20年7月中旬～8月末
第3回 〃 22年7月3日～9月25日
第4回 〃 22年12月24日～23年1月23日
第5回 〃 23年7月1日～8月26日
第6回 〃 24年7月上旬～8月25日
第7回 **明治25年7月7日～8月26日**
第8回 〃 28年3月14日～3月17日
第9回 **明治28年8月25日～10月18日**

秋空にそびえる天守閣

明治時代の三津街道松縄手

六、「故郷」正岡子規

世に故郷程こひしきはあらじ。花にも月にも喜びにも悲しみにも、先づ思い出でらるるは故郷なり。

故郷は学問を窮め、見聞を広くするの地にはあらず。されども故郷には帰りたし。故郷は事業を起し富貴を得るの地にあらず。されども故郷には住みたし。

両親、姉妹あるが為めに故郷に帰りたしと思ふもあらん。我は親はらからとも、今は故郷にはあらねど、猶故郷こそ恋しけれ。都にありて世を厭ふが為めに故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまで世を厭ふふしもなくて、猶故郷こそこひしけれ。

思へば十余年の昔、はやり気のおさえ難くて、単身故郷を出で行かんとこそは勇みしが、いざ首途といふに一点の熱涙は覚えず頬のあたりに流れ来るを、見送りの人に見せじと顔そむけたる時の苦しさ、何やら胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは、はなれうきものなめり。

故郷近くなれば城の天主閣こそ先づ目をよろこばす種なれ。低き家、狭き町、淋しき松縄手、丈高き稲の穂、鼻の尖に並びたる連山、をさなき頃より見馴れたる一軒家。見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く何れなつかしからぬはなし。

先づ身よりの内をここかしことおとづれて久濶の情をのぶれば、年老いたる婆々様の笑ひ声、痩せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居睡りする下女の顔さへ見覚えたるままに少しも変らず。

さて、変らぬは故郷よと思ふも、帰り着きし瞬間なり。変らぬはめでたけれど、全く変らねば何の面白き事かあらん。変らずと見るうちに、いささかながら彼も此も変り行きたるこそ、中々に聞きて、見てゆかしけれ。

人の上につきて第一に変りたるは、わが従弟妹の数のふえたると、其ひととなりたるなり。都の人こそ来たまへれ、われも其顔見んなどひしめきあひ、わが前に跪きて礼を述ぶるもあれば、襖の隙より恥かしげに窺ふもあめり。をさなき児ははじめて見たる顔もあり。さらぬもをさな顔のおもかげをおぼろげにとどめて、ふり分け髪の児、髭に変りたるも少からず。

曽て見し時には小学読本を高らかに読み上げて誇りかに人に聞かせたる男の子の、今ははや海陸軍を談じ外国の形勢を説く程になりたるもあり。…**中略**…

少き時より小説本を借りてなじみになりし本屋は昔の様ながら、見れば丁稚は我を十年前の華客とも知らで、よそよそしくもてなしたるも本意なく覚ゆ。

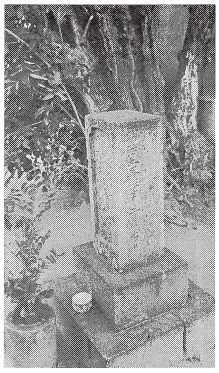
兼て知りたる道具屋は引越せしか、潰れしか、あらぬ店となりて、淋しかりし武家町の角に料理屋と芸者屋の檐を竝べたるもあいなしや。

いで菩提所に詣でて久しぶりに樒をも手向けんと辿り行けば、山門半ば崩れて一条の汽車道は其の傍を横ぎれり。あなやと驚きて少し左に曲れば数百の墓累々としてまだあれはてしとにはあらねど、彼鉄道に隔てられて境内をはなれたれば父君、祖父君などの墓のうしろは一歩ならぬに粟黍など秀でたり。一目見るより覚えず目をしばたたきぬ。

粟の穂のここを叩くなこの墓を

嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。

（新聞「日本」明治28・10・6掲載）


父君の墓
子規6歳の時に病没